

アイヌ口承文芸テキスト集 3

白沢ナベ口述 トパットゥミから逃れたウライウシナイの少年

採録・訳・註 中川裕

解説

今回紹介するアイヌ口承文芸のテキストは、1991年3月8日、千歳市蘭越の故白沢ナベ氏の御自宅において、筆者が氏から録音したウエペケレ「散文説話」であり（整理番号：N9103081.UP）、2001年度千葉大学普遍教育科目「アイヌ語4」（中級後期）で教材として使ったものである。なお、録音時には現在北海道大学文学部助教授である佐藤知己氏が同席している。なお、語り手の白沢氏については、『ユーラシア言語文化論集』3号（2000）のアイヌ口承文芸テキスト集1「狼から逃れた娘」を参照していただきたい。

あらすじ

私はウライウシナイというところで、父母と弟と暮らしていた。ある日のこと、弟をおぶって川上に魚とりに行き、暗くなってきたので家の前の舟着き場まで戻ってくると、家のまわりに低い柏の木の林があるように見える。私はトパットゥミが来たことを知り、川上へと逃げた。そのうちに川の両側から竹やぶが生い茂って重なりあっているところに出たので、弓の先で竹を持ち上げて、その下をくぐっていった。後ろから大勢の人間が私たちを追ってきているのが聞こえたが、竹が密になっているところまでやってきて、

「まだ子供だから、この竹やぶの下をくぐっては行けまい。きっと川に流されてしまったのを、我々が気がつかずに来てしまったのだろう」と言っているのが聞こえた。

私はどンドン山を登って逃げ、もうここまでは追ってこまいというところまで来て、竹の先を結んで小屋を作り、そこで暮らすことにした。魚をとってはそれを焼いて弟に食べさせていたが、弟が少し大きくなると、小屋に置いて山に行った。すると熊や鹿が狼に殺されているので、その肉をそいでは持って帰り、食べて暮らしていた。

そのうちに弟が歩けるぐらいになったところで、いつまでも山にいては見つかってしまうと考

え、人のいる村を探しにでかけた。大きな村を見つけたので、近づいていくと、犬たちが私たちを見て吠え、後ろからついてくる。

村のまん中に島のように大きな家があるので、その前に行って弟とふたりで遊んでいると、おばあさんが窓から顔を出して私たちの姿を見つけ、家の主人にそのことを告げた。主人は「戦いから逃れてきたものもいる、飢饉から逃れてきたものもいるのだから、入れてわけを聞いてやろう」と言って、私たちを招き入れた。

わけを尋ねられたので、これこれこういうことだと話すと、おじいさんは「フム！」と声を上げて立ち上がり、イケウエホムスという魔払いとねぎらいの儀礼を行い、おばあさんもペウタンケしながらイケウエホムスしてくれた。

「この子たちはカムイが見守ってくれたので生き延びて、私たちに会うことができたのだ」

そういつて、おじいさんたちはイケウエホムスの言葉をカムイに向かって唱えた。そのうちに日が暮れてくると、山に行っていた人たちが戻ってきて、神窓から肉を家の中に入れたので、おじいさんが私たちのことを話した。すると息子たちも「フム！」と声を上げて、イケウエホムスしながら家に入ってきた。

私たちはその息子たちを「大きい兄さん、小さい兄さん」と呼ぶようになり、兄弟のようにしてかわいがられて大きくなった。そのうち、村人たちは我々を気の毒がって、トパットウミに来た村をやっつけようということになり、みなで戦の支度をして、モシリパウンサラという村を目指して出発した。そのモシリパウンサラの村長の幣棚の傍らには大きな木が立っていて、その上にミムトウチが住んでいる。そのミムトウチが戦の守護神としてトパットウミについていくので、いつでもトパットウミがうまくいくのだそうだ。

一行は何日もかけて、神々に戦いのための祈禱をしながらモシリパウンサラにたどりつき、村長の家に行って談判を始めた、その間に他の者はその大きな木の下で火を焚いて、木を燃やした。ミムトウチが降りることもできずにいるうちに木が倒れ、みんながいっせいに襲いかかってミムトウチをやっつけた。

家の中ではわが村のおじいさんが相手の村長をやりこめて、「こいつは、嘘のチャランケで財宝を奪ってきたやつだ。みんな自分のものがあるかどうか確かめてみる」と叫んだので、大勢の人が集まってきて、「これはうちのだ。これもうちのだ」と言って杯やら鉢やらを持って行ってしまった。山のように財宝のある家であったが、宝物を奪い返されると、そこらへんの並の長者と変わらない程度であった。

「今度、嘘のチャランケをするようなことがあったら、生かしてはおかないからな」と言って、われわれはそこを立ち去った。

その後、私と弟はその村で大きくなったが、私はその家の末娘を妻として迎え、故郷に戻って家を建てて、村を再興するのがよかろうと言われ、ウライウシナイに戻って暮らすことになった。嫁さんも働きもので子供もたくさん生まれ、幸せに暮らした。弟も立派に成長して嫁さん进行、子供もたくさんできて、仲良く暮らした。川上の村の兄さんたちにも子供がたくさんできて、何かある度にお互いに行き来をした。子供たちも大きくなって、男の子も女の子たちもそれぞれ立派に仕事ができるようになり、私たちは何不自由なく暮らして年老いた。

こういうわけで若い時苦勞したのだから、自分が育てられた川上の村の人たちと喧嘩をせずに仲良く行き来して暮せよと言ひ残して、大往生した。

解説

このウエペケレは、白沢ナベ氏が若い頃兄のイソキチ氏から聞いたものだという。イソキチ氏は、目が悪いために按摩で身を立てていたという人で、色々なところを歩いてはユカラ、カムイユカラ、ウエペケレなど数多くの話を聞き覚え、按摩の傍らそれを聞かせることを得意としていたという。それが聞きたさに、客が彼を自分の家に何日も逗留させるということがあったという話である。

このウエペケレは、トパットゥミを主題に持つ話のひとつである。トパットゥミというのは、ウエペケレや各地の伝説中によく登場するもので、「群盗」とか「夜襲」などと訳されることが多いが、映画「七人の侍」に出てくる野武士のような、いわゆる盗賊団とは質の異なるもので、むしろ、和人との交流関係の密度の違いを背景にした、地域間の抗争とみなした方がよい。それに関するより詳しい議論は、別稿¹に譲るが、このトパットゥミは、肉親との別れと再会、主人公の流離と成長、復讐と凱旋など、ドラマとして格好の要素をふんだんに含んでいるので、これを題材にしたウエペケレは数多く、好んで語られるものとなっている。

この話でも、まだ幼い弟をおぶってひとりで魚捕りにでかけた少年が、帰りが遅れたおかげでトパットゥミの襲撃をまぬがれ、やがて成長して、廃村となった故郷の村を再興していくという、ドラマチックなお膳立てのストーリーであり、追っ手の声を後ろに聞きつつ、雪で覆われた竹やぶの

¹ 中川裕 (1998) 「口承文芸にみるトパットゥミ」帯広百年記念館編『平成9年度帯広百年記念館アイヌ文化シンポジウム「アイヌ民族野文化と歴史を再考する」』pp.51-59

下をかいくぐって逃げのびるシーンなど、映像化しても迫力あるものが撮れそうな場面が、あちこちに登場する。

しかしながら、このウエペケレからは前半部と後半部が何かちぐはぐな別の話のような印象を受ける。それは話を吟味していけば、単なる印象の問題ではないことがわかる。すなわち、この話の主人公である少年は、モシリパウンサラという村からやってきたトパットウミに、両親・一族を殺され、自身もあやうく殺されるところを逃れて、艱難辛苦の末、弟とともに川上の住人たちに救われ、そこで立派に成長する。そして、一人前の若者に成長したところで、村人たちとともに、一族の敵であるモシリパウンサラへ乗り込むのである。ここで聞き手が期待するのは、もちろんのこと、主人公の少年自身が親の仇である敵の一味を切り伏せ、復讐を遂げることである。そして通常、トパットウミを題材にしたウエペケレは、その期待通りに展開するのが常である。この話でもそれに応えるべく、村人たちは刀や槍を鋭利に研ぎ上げ、いまや立派に成長した弟も刀を携えて遠征に出発する。そして、道々神々へ祈りを捧げて援助を頼みつつ、敵の村に乗り込むのである。

ところがその後の展開は期待をまったく裏切るものとなっており、モシリパウンサラの村長が嘘の談判 (sunke caranke) をして集めたという宝物を、談判 (caranke) の末、村の人々に帰させただけで、一行はあっさりと引き揚げて行く。それも、その中心的な役回りは、育ての親である川上の村の村長が引き受けているのであり、主人公の兄弟はその復讐劇 (?) に最後まで何の役割を果たすこともなく終わっている。

これは明らかにウエペケレの一般的な展開から見て破格であり、おそらく後半部は、嘘の談判で人々を困らせている村長をこらしめるという、別の話の筋が混入してしまったものと考えられる。ただしその混入の仕方は、どこからどこまでがどちらの話に属しているのかがよくわからないほどに融合したものになっている。たとえば、敵の村の守護神であるミムトウチのモチーフは、もともとトパットウミの話の方に属していたと考えた方がつじつまが合いそうだが、せっかく刀や槍を研いで戦いに向かったのに、その武器はまったく使わずにミムトウチを殴り殺している。その後は全く血の匂いのしない話になっているので、ミムトウチのエピソードはこっちに属しているようにも見える。また、村人たちがそれを退治している一方で、別グループが敵の村長と談判を繰り広げるシーンなどは、村長を釘付けにしておいてミムトウチをやっつける、あるいはミムトウチを身動きできなくしておいて、村長をやり込めると言う作戦をとったという展開だとすると、最初からこういう話であったようにも見える。

ただし、この場面もよく見ると不自然さが感じられる。第一に主人公はいったいどこにいたの

か？ 何日も泊まりがけて苦勞してたどり着いた敵地で、主人公は敵の村長との談判にも、ミムトウチ退治にも直接加わっておらず、ミムトウチが殴り殺されるのを「見た」という展開になっている。どこから見たのか？ 家の外にいたのなら、なぜミムトウチ退治に加わっていないのか？ 家の中にいて談判に加わっていたのなら、なぜミムトウチ退治の一部始終が「見えた」のか？ この場面では主人公はあたかもふたつの場面を超越的に見下ろすナレーターのよう存在になってしまっている。これはアイヌ口承文芸の展開の仕方としては、あまり普通のものとは言えない。

ただし、これらの不自然さが別々の話の混淆によって起こったものだとしても、それは語り手の白沢ナベ氏の記憶違いによって引き起こされたものではないと思われる。そのひとつの証拠は、主人公が荒れ果てた故郷のウライウシナイに戻った場面で、白沢氏自身が「親の話をいわんの変だと思った」と語っているところに現れている。すなわち、トパットウミに殺された親の遺骨の眠る家に十数年ぶりに戻ってきたわけなのだから、そこで通常の展開として期待されるのは、親の供養をするという場面なのだが、それが無いので変だと思ったということである。この証言は、白沢氏が兄のイソキチ氏から聞いた時点で、すでに後半部が親を殺された息子の話ではなくなってしまっていたことを示唆している。

もともと、だからこの話には価値がないということを論じるつもりはない。これはウエペケレが生活の中で生きた伝承であった時代に、その実演と伝承の過程の中で起きた変容を表しているものであり、口承文芸学の資料として大変興味深いものである。また、物語の結構としてはいささかも足りない気はするものの、細かいひとつひとつの描写が、鮮烈なイメージや、文化誌的に色々と面白い情報をもたらしてくれ、細かく聞いて行けば行くほど、面白いテキストである。それについては、註でいくつか指摘しているので、参照されたい。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、= (イコール) は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。_ (アンダーライン) を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、an w_a → an ma. h_i や y_ak のような例では、h や y が脱落することを示す。また、<wa> のようにく>でくったものは、白沢氏の語り癖で次の語句を考えるとときに直前の語の最終音節等を繰り返すことがよくあるが、その音を示すものである。... とあるのは、単なるポーズ、言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思わ

れる場合に付す。その際、*aeoy ... などのように*を添えたものは、単語が言いさしになって、不完全な形で終わっていることを示す。なお、こうした言いさし・言いよどみは、それを示しておかないと、どこまでを言い直しているのか判断がつかなくなるような場合にのみ、示してある。

原文テキストとその訳は、段落ごとに対応するように左右に並べて提示した。註は各ページごとに脚註の形で示した。脚註中、(N9103081.FN) 等と書かれたものは、その文章が含まれるデータファイルの資料整理番号を表す。

なお、註における引用文献は、以下のような略称で示した。

萱野辞典：萱野茂（1996）『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂

久保寺辞典：久保寺逸彦（1992）『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道教育委員会

田村辞典：田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館

中川辞典：中川裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』草風館

本文

a=unuhu an a=onaha an w_a, Urayusnay² sekor
a=ye usi ta oka utar ne wa oka=an ruwe ne hike,
a=onaha ekimne kor, tup sumawe rep sumawe
eawnarura. kamuy ne yakka yuk ne yakka, poronno
ronnu pe ne korka,

a=akihi a=kay hine, ceppotukan=an³ kor pet
turasī arpa=an a arpa=an a ayne, poronno ceppo
a=rayke hi ne akusu, tane cup ahun wa, ceppo
a=nukar wa a=tukan h_i a=eramuriten pe ne kusu,
hosipi=an ka somo ki no iki=an h_i ne akusu, tane
sirhomar wa kusu, orowano hosipi=an w_a san=an.
hosipi=an w_a san=an ayne, a=uni ta petaru⁴ or_
ta sirepa=an w_a, petaru ka ta yan=an w_a
inkar=an.

父がいて、母がいて、私達はウライウシナ
イというところに住んでいる一家であった。

私の父は山へ行くと、二頭の獲物三頭の獲物
を捕ってくる。クマでもシカでも、たくさん
捕ってくる人であったが、

(ある日のこと) 私は弟をおぶって、魚を
弓で射ながら川をのぼって行き、小魚をたく
さん捕っていた。そのうちもはや日も暮れて
きたが、小魚がまだ見えて弓で射れるのが面
白くて、家に戻りもしないで魚捕りをしてい
たが、そのうちもうあたりが見えなくなって
きたので、戻って山を降りた。戻って降りて
行って、家の舟着き場にたどりつき、舟着き
場に上がって見た。

² Urayusnay : 胆振地方の散文説話によく出てくる地名。千歳地方の物語の系譜を探るのに、ひとつの大きな手がかりを与える。実際の地名としてどこを指しているのかは、白沢氏にも不明。

³ tukan は「一を弓で射る」。ceppo 「小魚」を捕まえるひとつの方法として、peraay 「籠矢」という、先端がへら状になった矢で魚を射て捕る手法がある。おもに子供の行う漁法である。「わしは見たこともないんだけど、そうして食べるもんだって、わしの父親が言って聞いたのに、お話にもでたから。ヤマベなんか、あんまり打ちすぎると、真中切れるっていうもの。」(N9104041.FN)

⁴ petaru は pe 「水」 ta 「一を汲む」 ru 「道」で、原義は水を汲むために川に下りる道であるが、同時に舟を上げ下ろしする場でもあるので、「舟着き場」とも訳せる。これに関して、次のような興味深い情報がある。

(白沢) ruesan っていうのは、あれでしょう。海の舟の上がり場が ruesan っていうらしいよ。

(中川) 川の近くで使う言葉じゃないの。

(白沢) 浜の人の言葉。ruesan ならね。ここでは petaru。舟の出たり入ったり上がったり下りたりすること。とこいうんだ。ruesan。ここでは水汲み場が petaru っていうの。(N9301122.FN)

ruesan は、久保寺辞典では「海及ビ河ノ船着場ノ折口、下口、村口」となっている語であり、地名にも使われる。山でそれに対応する言葉が petaru であるという証言は面白い。

a=unihi kopak un inkar=an akusu, a=unihi
okari ram komni tay⁵ an apekor siran w_a,
a=ekimatek kusu

“yan=an nani arpa=an yakun a=i=rayke”

sekor yaynu=an kusu, orano <no> pet turasi
kira=an w_a, hosipi=an wa arpa=an a arpa=an
a ayne, toop tane <ne> top sar⁶ uhekota
hepokiki wa okay⁷ pe ne kusu a=kor ...

なんていうの？⁸

中川 “ku?”

ku ani a=epunpa wa, corpoki a=kus kor
kira=an w_a, hemesu=an ayne, <ne> erikoma wa
arpa p pet ne kusu, kari hemesu=an ayne,
inu=an akusu, inne topaha i=kesampa wa arki
hawe as. pet turasi ki hine, top sar eukamu
wa arikinne ironne p ne kusu, oro pak arki wa
oro wa

家の方をしてみると、家の周りに低い柏の
林が立っているように見えるので、私はびっ
くりして、

このまま上がって行ったら殺されてしま
う」

と思ったので、川を上って逃げ、(山の方
へ) 戻ってどンドン行くと、竹やぶが両側か
ら頭を垂れている(ところに来た)ので、私
の・・・

なんて言うの？

中川「弓？」

弓で(竹の)先端をもち上げて、その下を
通って逃げ、山を上って行くと、高い所から
流れて来ている川なので、それに沿って上っ
て行って、耳をそばだてると、大勢の人間が
私達を追いかけてくる声が聞こえる。川を上
って追いかけて来ると、竹やぶがとても深く
なっているので、そこまでやって来て、

⁵ ram komni tay an apekor siran というのは、topattumi の軍勢が家を取り巻いていることを示す常套句であるが、なぜこういうのかについて、白沢氏は「柏の木なら冬も落ちないからね」(N8808291.FN) と述べている。柏の葉は秋に枯れ落ちず、越年して初夏新葉が出る前に散るので、冬の闇の中では人影のように見えるということである。ちなみに、註7でも触れるように、この話は季節的に冬の最中に設定されている。

⁶ top sar : sar は通常アシなどの群生地に用い、tay は樹木の群生地、すなわち「林」に用いる。つまり、この表現から top 「ネマガリダケ」はアシなどのような草本類同一にみなされていることがわかる。

⁷ top sar uhekota hepokiki wa okay : この部分に関して、白沢氏はこうコメントしている。「両側から雪に押されるから、曲ったとこさ。その川のほうさ、川のほうになんもないでしょ。つかえるものもないんだから、両方からこうかぶさったの、小川さかぶさったの」(N9104041.FN)。この説明で、これが冬の最中の話であるということがはっきりする。

⁸ なんていうの? : a=kor ku 「私の弓」と言おうとして、ど忘れしてしまったのだと思われる。

"naa hekaci ne kusu, tan top sar corpoki anak kus eaykap pe ne nankor. mom w_a isam ruwe a=eramuskari no arki=an ruwe ne nankor kusu, hosippa=an yak pirka"

sekor kane ukoysoytak hawe sioka un a=nu kor, hemesu=an ayne, hemesu=an ayne, nupuri ka wa ratki pet ne kusu, nupuri ka ta ... nupuri kotor_ ta hemesu=an hine orowa, te pakno ek=an w_a, hosippa hawe a=nu p ne kusu "akkari a=i=hunara ka somo ki nankor"

sekor yaynu=an kusu, orowa a=kor sontak⁹ a=ranke hine, top uhekota a=erewpa wa, a=ukosina wa, cisehe¹⁰ a=kar hine, orowa oro ta a=reska. kes to an kor cepsuwe=an w_a paro *aeoy ... suwe=an pe でない a=ma wa¹¹ paro a=eoyki kor a=resu kor, oro ta an=an ayne, tane ponno poro wa kusu

「まだ子供だから、この竹やぶの下は通ることができまい。流されてしまったのを気がつかないで来てしまったのだろうから、戻ることにはしよう」

などと言いつつ声を後ろに聞きながら、上って行って、上っていくうちに、山の上から流れ落ちる川なので、山の上に・・・山の斜面を上って行って、そこまで来たところで、（敵が）戻って行く声が聞こえたので、「これ以上は探しに来ないだろう」

と思ったので、赤ん坊を下ろして、竹の先端を両側から曲げると、縛り合わせて、それで家を作り、そこで弟を育てることにした。毎日魚を煮て食べさせ・・・煮たんじゃなく、焼いて食べさせながら育てて、そこで暮らしているうちに、少し（弟が）大きくなったので、

⁹ sontak : かつては、子供が生まれても、ある程度性格などがはっきりしてくるような年齢まで名前をつけず、それまでは sontak<si「糞」 on「発酵した」 tak「塊」、poyson<pon「小さい」 si「糞」 on「発酵した」などと呼んだという。その程度の年齢の子供を指す言葉。本文では場面に応じて、「赤ん坊」とか「弟」などと訳している。

¹⁰ cisehe : cise「家」は、ku=kor cise「私の家」などと言う所有表現の場合には通常所属形にならない名詞だが、この場合は「(竹で作られた)家」という、素材と製品の関係を表すために所属形をとっている。なお、韻文中では a=un cisehe、a=kor cisehe のように、所有表現の場合でも所属形が用いられることがある。

¹¹ suwe=an pe でない a=ma wa : この言い直しは興味深い。つまり通常魚は suwe「煮る」ものとして意識されており、ma「焼く」というのは特殊な事態であるために、まず suwe という動詞の方が出て来てしまったと考えられる。多くの日本人は逆の連想、つまり魚といえば焼く方を先に思い浮かべるのではないかな？

orowano a=hoppa wa, ekimne ka omanan=an kor, kim ta... あれ kamuy ka a=ronnu wa oka, yuk ka a=ronnu wa oka. horkew kamuy or wa a=ronnu¹² p ne kusu, <su> newaanpe ... <pe> kamuy ka kam e p ne kusu, yuk ka ronnu wa oka.

newaanpe kamihi a=mespa wa a=kor wa ek=an w_a, a=ma wa a=kor sontak turano a=e kor oka=an ayne, <ne> tane anakne, a=kor sontak reye wa soyne ka eaykap kuni ne, okari toproski=an w_a okay pe ne kusu, a=hoppa wa ekimne=an ranke ekimne=an ranke wa, paro a=eoyki. cepkoyki=an w_a paro a=eoyki kor,

"a=uni un sap=an yakka, kanna a=i=nonkar¹³ wa a=i=rayke yak wen"

sekor yaynu=an kusu, orowano oro ta patek a=kor sontak a=resu kor an=an ayne, tane apkas wa, i=tura wa omanan ka easkay pakno poro ruwe ene an h_i ne.

そこで、(弟を)置いて、山へ狩に行くと、山で・・・クマも殺されており、シカも殺されている。オオカミに殺されているので、それ・・・クマも肉を食うので、シカを殺して(その死骸が)ある。

その肉をむしって持って来て、焼いて赤ん坊と一緒に食べて暮らしていた。そのうちに、今度は赤ん坊が這って外に出たりできないように、まわりに竹を立てておいたので、(赤ん坊を)置いて山に狩に行くようになり、それで生活した。魚を捕って生活しながら、

「我が家の方へ下りていっても、また探しに来られて殺されたらまずい」

と思ったので、それからそこでばかり赤ん坊を育てているうちに、もはやあんよが出来、連れて歩き回れるくらいに大きくなった。

¹² horkew kamuy or wa a=ronnu : このようにオオカミは、狩のできない女・子供に肉を授けてくれる神として敬われているのだという報告が各地にある。

¹³ nonkar は「～の様子を見に行く」。留守にした家がどうなっているかとか、獲物が罠にかかっているかなどを確かめに行く時に使う言葉であるが、topattumi の場合には一度全滅させたはずの村に誰かが残っていないかどうか、確かめに戻るのである。

"nenō kim ta patek oka=an y_akka wen"

sekor yaynu=an kusu, neun ka <ka>
kotanhunara=an, aynuhunara=an w_a inkar=an
sekor yaynu=an kusu, orowa a=kor sontak teke
ani¹⁴ hine a=tura wa, top corpok a=opospa wa,
orowa, orowano kotanhunara=an pe ne kusu,
aynu-hunara=an pe ne kusu, neun paye=an humi
ne ya ka a=eramuskari kor payeka=an ayne,
kotan a=pa ruwe ene an h_i ne.

inne kotan, poro kotan a=pa ruwe ene an h_i
ne wa, seta utar i=nukar ka eramuskari seta
utar, i=kotoyse wa i=emik hawe wenruy kor,
i=kesanpa wa paye=an ruwe ene an h_i ne.

kotan soy¹⁵ a=kus wa paye=an ayne, kotan
noski ta mosir pak cise, poro cise an w_a kusu,
soyke ta paye=an hine, <ne> utura sinot=an
kor_ cise soy ta oka=an.

「こんなふうには山にばかりにいるのはまず
い」

と思ったので、どうにかして村を探し、人
を探してみようと思ったので、そこで赤ん坊
の手を引いて連れて行って、竹の下をくぐっ
て行って、そして、村を探しに、人を探しに、
どこへ行ったらいいのかもわからぬままに
歩き回っているうちに、村を見つけた。

にぎわった村、大きな村を見つけると、私
たちを初めて見る犬どもが、群がって来てひ
どく吠えかかりながら、私たちを追いかけて
来る。

家々の間を通って行くと、村のまん中に島
ほどもある家、大きな家があったので、その
前へ行って、(弟と)一緒に遊びながら家の
外にいた。

¹⁴ teke ani : 手をとる (ani) 主体は自分のはずだから、ここは teke a=ani となるべきところではな
いかと思われるが、この後もたびたび同じ表現が用いられるので、単なる言い落としではないよう
である。

¹⁵ kotan soy : 文字通り訳せば「村の外」であるが、道を挟んで家が並んでいる、その家の間、す
なわち村の中を通っている道のことを指しているのだという。

a=kor sontak tura ... a=tura (wa?) sinot¹⁶
kor oka=an akusu, cise or wa i=oyamokte rupne
mat sinep, puyar or_ ta etuk hine i=nukar wa,
orowa hosipi wa ene itak ... ape sam un hosipi
wa, orowa ene itak h_i ene an h_i.

"soy ta siketokna wa a=eramuskari
hekattar arki wa oka ruwe ene an h_i ne.
ahupte ciki he pirka, somo ciki he pirka?"

sekor kane <ne> cisekorkur kouepekennu
akusu,

"a=ahupte wa, tumi sawot pe ka oka, kem
sawot pe ka okay pe ne kusu, a=ahupte wa ene
haweoka hi a=nu kusu ne na. tunas ahunke ora
ki."¹⁷

sekor kane caca itak hawas. poro kur itak
hawas ruwe ene an h_i ne hine, <ne> orowa
i=ahunke kusu soyne hine, <ne> a=kor sontak
pon tekehe ani kane hine,

"ahup w_a apekur y_an. sini yan, sini
yan."

赤ん坊と一緒に・・・一緒に遊んでいると、
家の中から不審に思ったおばあさんがひと
り、窓から顔を出して私たちを見た。そして、
戻るところ言った・・・囲炉裏のそばに戻
ると、こう言った。

「表に見たことのない子供達が来ていま
すよ。入れたほうがよいですか？ 入れない
ほうがよいですか？」

と、家の主人に尋ねると、

「入れてやって、戦争から逃れてくるもの
もいる、飢饉から逃れてくるものもいるの
だから、入れてやってどのような次第か聞
くことにしよう。早く、入れてやりなさい」

と、おじいさんの言う声がある。年輩の
人の言う声があると、私たちを中に招く
ために（おばあさんが）出て来て、私の
弟の手をとって

「入って火に当たりなさい。休みなさい、
休みなさい」

¹⁶ a=tura (wa?) sinot : wa があるようにも、tura の a が長く引き延ばされただけのようにも聞こえる。どちらにせよ、sinot 「遊ぶ」には人称接辞がない。tura-sinot のように、同時に行われるような行為を表す他動詞と自動詞が組み合わさって、複合的な他動詞を作る現象は、旭川方言や、十勝方言など、いくつかの方言に見られる現象である。それと同じものか？

¹⁷ 家の者（多くは女性）が外の様子を見て、見知らぬ者の存在を家の主人に知らせ、主人が「中に通せ」というこのような対応の描写は、極めて常套的なものである。対応する家人がいない場合は、主人が囲炉裏の前に座ったまま、「案内する者がいないので、中に入れ」と言うのが普通である。

sekor hawean kor ahun pe ne kusu, asinuma
ka os nani ahun=an ruwe ene an h_i ne akusu,
onne kur setursesekka wa an ruwe ene an h_i
ne hine, orowa hopuni¹⁸ hine,
i=kouepekennu¹⁹.

“apekur y_an. apekur y_an”

sekor kane hawas pe ne kusu, ape sam ta
nani asinuma ka arpa=an. a=kor sontak ka
nani ape sam ta arpa wa a ruwe ene an h_i ne
hine, ekasi or wa a=i=kouepekennu p ne kusu,

“somo a=ye hike nep rakaha ne ya?” sekor
yaynu=an pe ne kusu,

“tap ne kane, Urayusnay sekor a=ye usi ta
an ... oka utar a=ne ruwe ene an h_i ne a p,
<a> ceppokoyki=an kusu a=kor sontak a=kay
hine, <ne> ceppokoyki=an kusu pet turasi
arpa=an ayne, <ne> tane nupuri kurka cup
rari²⁰ wa, sirhomarhomar kane siran pakno,
cep a=nukar pe ne kusu, ceppotukan=an hine,
poronno saranip or esik wa a=kor wa tane
san=an ayne

と言いながら家に入っていったので、私も
すぐ後について入ると、老人が（横になって）
背中を囲炉裏の火であぶっていたが、起き上
がると、私に言った。

「火に当たりなさい。火に当たりなさい」

と言うので、火のそばにすぐ私も行った。
弟もすぐに火のそばに行って座ると、おじい
さんに（ことの次第を）尋ねられたので、

「言わないでいても何のいいことがある
う？」と思ったので

「これこれこういうわけで、ウライウシナイ
というところに私たちはいましたが、小魚捕
りに弟をおぶって、小魚捕りに川を上って行
って、もう山の上に日が沈みかかって、あた
りが暗くなって来るまで、魚が見えるので、
小魚捕りをして、背負い袋が一杯になるほど
たくさん捕って山を下り、

¹⁸ hopuni は通常「立ち上がる」「飛び上がる」などと訳されるが、この場面では明らかに横にな
って寝ていた状態から、座った状態へ移行したのである。すなわち ho-「尻」puni「一を持ち上げる」
が原義ではあるが、かならずしも尻を動かす必要はない。

¹⁹ i=kouepekennu : 「私に尋ねた」というのは、次の「火に当たりなさい」というせりふにかかる
動詞ではないだろう。訳文は日本語としてつながりのよいようにしたのであって、この語の訳では
ない。

²⁰ nupuri kurka cup rari : 文字通りには「山の上を太陽が押さえつける」。日が暮れることを表す常
套句だが、よく感じの出た表現だと思われる。

sirkunne no ... nosirkunne wa, <a> petaru
or_ ta sirepa=an ruwe ene an h_i ne hine, <ne>
petaru or_ ta sirepa=an ruwe ene an h_i ne
hine, cise kopak un inkar=an akusu, a=unihi
okari ram komni tay as apekor inkar=an²¹.

yan=an w_a ne yakne wen ruwe ne. a=kor
sontak turano a=i=rayke hike nep rakaha ne ya,
sekor yaynu=an kusu, orowano pet turasi a=kor
ceppo a=ani wa orowano kira=an w_a hosipi=an
ayne, <ne> erikian nupuri ka wa ratki ...
ratki pon pet ne kusu, nupuri corpok ta
arpa=an kor, tane top sar an pe ne kusu, ne
top sar pet ka un uekari kamu p ne kusu,
newanpe a=epuni wa, orowano corpoki a=kus wa
kira=an akusu, i=okake un, top sar ...
ironne top sar an usi pakno arki wa, orowa ene
haweoka hi.

'naa pon pe ne kusu, worosma yakun mom w_a
ray pa wa isam a ruwe ne nankor. tan nupuri
turasi anakne <ne> hemespa eaykap pe ne ruwe
ne.'

sekor kane haweoka kor hosippa hawe a=nu
ruwe ne wa,

かなり暗くなった頃に、舟着場に着いて、
家の方を見ると、家の周りに低い柏の木の林
が立っているように見えます。

岸に上がってはまずい。弟ともども殺され
たら何もならない、と思ったので、川を伝っ
て小魚を持って逃げ戻るうちに、高い山から
落ちてくる小さな川なので、山の下にやって
くると、竹やぶになっていたので、その竹や
ぶが川の上に両側からかぶさっていたので、
その先っぽを持ち上げて、その下を通過して逃
げたところ、後から、(追っ手が) 深い竹や
ぶになっているところまでやって来て、こう
言いました。

『まだ小さいものだから、水の中に入ったら
流されて死んでしまったのであろう。この山
は登っては行けないからな』

と言いながら引き返して行った声が聞こ
え、

²¹ apekor inkar=an : 日本語では「-のように見える」にあたる場合でも、この場合は見る対象が cise okari 「家の周り」という「場所」であり、具体的にはあらかじめ存在していない。こういう場合は自動詞の inkar を用いる。同じように訳せる場合でも netopake anak moyuk hene ne ruwe ne apekor a=nukar (N8808282.UP) 「体はタヌキかなにかのように見える」という文の場合は、netopake 「体」が見る対象として存在しているので、他動詞の nukar を用いる。

orowano, <no> nupuri ka wa ratki pon pet
ne kusu, kari hemesu=an ayne, nupuri hontom
pakno hemesu-easkay=an ruwe ne hine, oro ta
top sar uhekota ... uhekota uhekota a=erewe
wa cisehe a=kar wa, corpoki ta a=kor sontak
a=resu ruwe ene an h_i ne.

cepma=an w_a, cep a=e kor siknu=an w_a
oka=an ruwe ene an h_i ne a korka, tane reye
easkay pakno poro wa, orowa a=hoppa kusu,
cise okari soyne eaykap kuni ne, <ne>
toproski=an w_a, a=ukosinanpa wa a=roski wa,
orowa a=hoppa wa ekimne=an kor, yuk raycep ka
a=pa, kamuy raycep ka a=pa ruwe ene an h_i ne
wa, newaanpe a=ma wa paro a=oyki,
a=eyayparoyki kor oka=an ayne, tane pakno
a=akihi poro ruwe ene an h_i ne wa kusu

' neno kim ta patek eci=oka hike nep rakaha
eoma ya?'

sekor yaynu=an kusu, tane apkas easkay wa
kusu, teke ani wa²², <wa> aynuhunara=an,
kotanhunara=an sekor yaynu=an kusu,
a=tekeani ... a=ani wa top sar corpok wa
soyenpa=an ruwe ene an h_i ne wa,

それから、山の上から落ちてくる小川なの
で、それに沿って登って行くうち、山の中腹
まで登ることができました。そこで竹やぶを
互いに・・・互いの方に曲げて、それで家
を作って、その下で弟を育てました。

魚を焼いて、魚を食べて生き延びていたの
ですが、(弟が) もう這い這いができるほど
大きくなると、置いて行くために、家の周り
に出られないように、竹を立てて、繋ぎ合
わせて立てて、(弟を) 置いて山へ行くと、シ
カの死骸も見つかり、クマの死骸も見つかり
ます。それを焼いて食べさせ、自分も食べて
暮らしているうちに、ここまで弟が大きくな
ったので、

「こんなふうに山の中にばかりいてもしよ
うがない」

と思ったので、もう(弟も) 歩くことがで
きるようになったので、手を引いて、人探し、
村探しをしようと思ったので、手を引いて竹
やぶの下から出て来て、

²² teke ani wa : 註 14 と同じく、ここでも人称が落ちている。あたかも teke ani wa 全体がひとつの副詞として機能しているかのようである。

orowano, kotanhunara=an, aynu-hunara=an
 sekor yaynu=an kusu, a=kor sontak teke ani wa
 omanan=an ayne ... omanan=an ... ene
 sikiru=an kor kotan an hi²³ ka a=erampewtek pe
 ne kusu, aretarakayki teke ani wa,
 kotan-hunara=an ayne, tan te oro, tan kotan
 a=pa ruwe ene an h_i ne wa kusu, <su> cise soy
 ta utura sinot=an kor oka=an ruwe ne.”

sekor itak=an akusu, nea caca kamuy²⁴
 humse tura hopuni hine, ikewehomsu²⁵. こんど
 rupne mat ka <ka> pewtanke²⁶ kor ikewehomsu.
 uekari,

”sontak utar, neun ne korka kamuy sikkasma
 wa oka wa siknu wa, a=pa hawe, arki hawe ne
 wa”

そして、村を探そう、人を探そうと思っ
 たので、弟の手を引いて歩き回っている
 うち・・・歩き回りました。こんなに近い所に
 村があるとは知らなかったの、やみくもに
 手を引いて、村を探しているうち、ここ、こ
 の村を見つけたので、家の前で一緒に遊んで
 いたのです」

と話をすると、そのおじいさんは雄叫びを
 上げながら立ち上がって、イケウエホムス
 をした。おばあさんもペウタンケしながら立ち
 上がってイケウエホムスをした。かわるがわ
 る、

「子供達が、どういうことであれ神の御加護
 があって生き延びて、我々が見つけ、ここへ
 やってきたということだ」

²³ ene sikiru=an kor kotan an hi : 文字通りには「このように振り返ると村があること」

²⁴ caca kamuy : kamuy というのはここでは一種の尊称であり、このおじいさんは話の展開上どう
 見ても人間である。

²⁵ ikewehomsu : i-は接頭辞で、kewehomsu、ukewehomsu など、様々な形で用いられる。久保寺逸
 彦は「北海道アイヌの葬制 (続)」『季刊民族学研究』20/3-4 (1956) で、ukewehomsu について「溺
 死、焼死、或は熊に殺された等というような不慮の死・変死・横死が生じた場合、その他、危難災
 害が起こった際に、その一村を挙り、又遠近の村の男女も弔問応援して行く儀礼」(pp.183-184) と
 しているが、萱野辞典ではウケウエホムスについて「互いにねぎらう」とし、田村辞典では kewe
 homsu について「...に危なかったことの見舞いを言う (なんとか無事に切り抜けた時に)」という説
 明をしている。ここでの用法は、久保寺説より、萱野・田村説で解釈した方があてはまりそうだが、
 なお雄叫びを上げ、ペウタンケをしながら行うということで、魔払いのためという要素も強く感じ
 られる。この問題については、川井麻紀が「ukewehomsu (ウケウエホムス) とは何か」(1999 年度
 千葉大学大学院文学研究科修士論文: 未刊) で、詳細に論じている。

²⁶ pewtanke : 女性が緊急事態の時に上げる叫び声。

sekor haweoka kor, kamuy kewehomsu <su>
ikewehomsu itak ki pa kor, ekasi anak
ikewehomsu itak kamuy or unno ye kor
ikewehomsu ruwe ene an h_i ne hine

orowano, oro ta oka=an korka, ekimne
utar ... okkaypo utar oka noyne siran korka,
ekimne wa oar isam ruwe ne noyne siran ruwe
ene an h_i ne hine, <ne> sironuman akusu,
ekimne utar kam sike ki wa sappa. rorunpuyar
kari ukokamahupte²⁷ kor

“tapne kane oka hekattar arki ruwe ne.”

sekor kane poho utari ne rokoka anan²⁸ hine
koysoytak akusu, ne ipone utar ka humse hawe
wenrui kor, osoyne wano ki kor ahuppa. orano
ikewehomsu.

a=kor sontak kokusis, i=okari ikewe
a=homsu²⁹ ruwe ene an h_i ne. <ne>

“sonno iyoasitomare. ene an sukup
hekattar utar, ohonno kim ta sukup anan
hawe.”

と言いながら、神にイケウエホムスの言葉
を唱えながら、おじいさんはイケウエホムス
の言葉を神々に向かって唱えながらイケウ
エホムスをした。

そして、私たちは（そのまま）そこにいた
のだが、山に行った人たち・・・若い男の人
たちがいるようなのだが、山へ行ってしまっ
ていない様子であったが、日が暮れると、山
へ行った人たちが肉の荷を背負って下がっ
てきた。神窓から肉の受け渡しをしながら、
「これこれの事情の子供達がやってきたの
だ」

と息子達に言うと、その息子達も雄叫びの
声を激しく上げてながら、表から入って来
た。そしてイケウエホムスをした。

弟ともども、私たちのまわりでイケウエホ
ムスをしてくれた。

「本当に恐ろしいことだ。こんなまだ若い子
供達が、長いこと山の中で大きくなっていた
なんて」

²⁷ ukokamahupte : u-「互い」 ko-「一とともに」 kam「肉」 ahupte「一を入れる」。rorunpuyar「神窓」を通してこれを行うことに注意。すなわち、獲物の肉は kamuy からの土産物であるから、通常の玄関から入れることをしないのである。

²⁸ rokoka anan : anan は他方言の aan、awan に当たるものであり、「後からそうであったことがわかった」という事態を表す助動詞だと思われる。また、rokoka はその複数形に相当する形だと思われるが、白沢氏はここでのケースのようにそのふたつを並べて同時に用いることが少なくない。

²⁹ ikewe a=homsu : ikewehomsu は連動詞（中川辞典、p.7参照）であるので、このように後半部の動詞部分に人称接辞をつけた形でも表現される。ただし、homsu という動詞が何を指すのかは詳らかではない。

sekor haweoka kor, ikewe a=homsu hine,
 orowano oro ta ine ... ine okkayo ahun ruwe
 ene an h_i ne. oro ta, sine menoko, iyotta pon
 pe ne anan pe an ruwe ene an h_i ne hine,
 orowano "pon a=yupi poro a=yupi" sekor a=eyop
 kor oka=an pe ne kusu, i=omapreska ...
 i=omapresu³⁰ kor oka=an ayne <ne>

tane anakne asinuma ka okkayo sirpo
 a=osmare. orowa "a=yuputari" sekor itak=an
 kor ... a=eyop kor an=an pe ne kusu,
 a=yup-utari a=tura³¹ wa ekimne=an kor, <kor>
 a=yuputari akkari ka irayepirka=an³². rupne
 kamuy patek a=tomot³³. rupne yuk patek a=tomot.
 cepkoyki=an kor, rupne cep patek a=tomot kor
 oka=an ruwe ene an h_i ne akusu,

と言いながら、イケウエホムスしてくれた。
 そしてそこに4人・・・4人の男達が入って
 きたのだ。そこに、ひとり娘がいて、その娘
 が一番年下だった。以来、「小さい兄さん、
 大きい兄さん」と呼んで暮らしていたので、
 可愛がられて育てられているうちに、

今や私も一人前の男らしい顔つきになっ
 てきた。そして「兄さんたち」と呼びながら
 いたので、兄さんたちに連れられて山に行く
 と、兄さんたちより狩がうまい。大きなクマ
 にばかり出会う。大きなシカばかりに出会
 う。魚を捕っても、大きな魚にばかり出会っ
 てくらししていると、

³⁰ i=omapreska ... i=omapresu : reska も resu も「一を育てる」という意味の他動詞。方言によってどちらが用いられるかが異なり、『方言辞典』に従えば、大平洋岸地域が resu で、道央・道北部が reska。この方言にその両方の形が出てくることは、千歳方言の成立を考える上で面白い事実である。意味的な違いがあるかどうかは不明である。

³¹ a=tura : tura を「一を連れて行く」と訳すと、ここでは主人公自身が兄達を連れて行ったことになってしまいそうだが、この動詞には動作主体が対象者をリードするという意味はない。つまり、i=tura も a=tura もほとんど同じような状況で使われる。そういう点からむしろこの動詞は「一と同行する」という訳をつけておいた方が適当である。

³² irayepirka : i- (不定) raye 「一を殺す」 e- 「一について」 pirka 「良い」 だと思われる。raye はおそらく ray 「死ぬ」の他動形と考えられるが、このような複合語の中でしか用いられず、自立語としては rayke が通常用いられる。

³³ rupne kamuy patek a=tomot : tomot は「一に出会う」。「狩が上手だ」ということの説明として、大きなクマやシカなどに出会うということを挙げているのに注目。すなわち、弓の仕掛け方などの猟の技術そのものではなく、神々が好意を持って寄ってくるというところに、狩人としての技量を考えているのである。

orowa, inne kotan an pe ne kusu,
ukoramkorpa hine,

"hekattar utar eytasa a=kemnu ruwe ne kusu,
<su> arki usi un ... topattumi kusu arki
kotan³⁴ a=uskaepaye³⁵ ro!"

sekor itak akusu, kotan or un utar ka,
"pirka hawe ne. nep purihi ene an w_a <ma>
ki pa p oka³⁶ hawe ne yakun, ikasuy=an kusu ne.
itura=an kusu ne."

sekor haweoka kor, orowano oro ta tumi ...
topattumi esikarkar. emus ka nipi kar, op ka
kar³⁷ kor oka=an pe, a=eywanke kuni p ka <ka>
ruyke rok. emus ka ruyke rok ruyke rok
wa, <wa> "ituyeno ruwe ne." sekor haweoka kor
oka=an ayne, orowa ne topattumi kusu どこだ
か行ったんだっけな? 忘れた。

中川「Kusur でないの?」³⁸

そのうち、大きな村なものだから、みんな
で相談して

「子供たちがあまりに気の毒なので、やって
きたところへ・・・トパットウミしにやって
きた村を全滅させに行こう」

そういうと、村の人たちも、
「それはいい。そんな悪い根性をしているや
つらがいるというなら、お手伝いしましょ
う。一緒に行きますよ」

そう言う、それからそこでトパットウミ
の準備を始めた。刀も柄を作り、槍も作り、
武器になるものを研いだ。刀も研いで研い
で、「よく切れるぞ」と言いながら、そうし
ていて、そしてそのトパットウミしに、どこ
に行ったんだっけな、忘れた。

中川「釧路でないの?」

³⁴ topattumi kusu arki kotan : 日本語の訳では分かりにくい、この kotan 「村」は arki 「来る」の
意味上の主語である。こんなところにも、topattumi というのは、何かならず者の集団のようなもの
ではなく、「村」が他の村を攻めるものだ意識されていることがわかる。

³⁵ a=uskaepaye : uska 「一を消す」 e- (充当相接頭辞) paye 「行く」。この e- は通常、「一について」
「一で以って」と訳されることが多いが、ここでは「一しに」と訳するのが適当なところ。uska とい
う他動詞を抱合していることに注意。このような例としては他に turepta-e-arpa 「ウバユリ掘り・に・
行く」がある。ただし、turepta は自動詞である。

³⁶ nep purihi ene an wa ki pa p oka : 逐語訳すれば「何の根性がこのようにあって、(そう)するも
のがいる」。

³⁷ emus ka nipi kar op ka kar : nip 「柄」を作るということは、刀身だけがあったということになる。
実際にそのような形で保管しておくことがあったかどうかは別にして、ウエペケレ中では、家財道
具をいっさい奪われたが、自分の寝ているところに敷いてあるござの下に、刀の刃ひとつ、槍の穂
先ひとつ残っていたのが奪われずに残り、それに柄をつけて復讐に乗り込むという話がよくある。

³⁸ Kusur : 日高地方のウエペケレには、Kusur 「釧路」からトパットウミが来るという話が非常に
多いので、そう聞いてみたのである。

Kusur であっ ... Kusur ... 何だっけ? あの、Mosirpa-un-sar³⁹ or wa topattumi ek っていうんだけども。

中川「Mosirpa-un-sar」

うん。Mosirpa-un-sar or wa topattumi ek ruwe ne kusu, eun paye=an etokus ruwe ne na⁴⁰

sekor haweoka kor, tumi esikarkar okerpa wa, orowaun poronno ... rewsu ranke rewsu ranke, inonnoytak kor paye kuni p ne kusu, poronno aep ka se hine, orowano rewsu=an ranke rewsu=an.

a=akihi ka tane poro okayo ne an pe ne kusu a=akihi ka emus ka kor op ka kor wa, orowano paye=an ruwe ne hike, rewsipa. hankeno hankeno paye=an kor rewsipa wa, orowano tuminonnoytakpa⁴⁰. uos a=karpa uos a=karpa ki ruwe ene an h_i ne wa, nepenepo pawetokkor wa hawas y_a ka a=eramuskari no, si pawetok patek ne rokoka anan w_a, tuminonnoytak easkay utar patek ne wa, <wa> a=tura wa paye=an ruwe ene an h_i.

釧路であっ・・・釧路・・・何だっけ? あの、モシリパウンサラというところからトパットウミが来たっていうんだけども。

中川「モシリパウンサラ」

うん。「モシリパウンサラからトパットウミが来たので、そこへ行くことにしよう」

と言いながら、戦争の支度を終えて、それから何日も泊まりがけで、お祈りをしながら行くことになるはずだから、食料もたくさん背負って、それから何日も泊まり泊まりして(行った)。

弟も、もう立派な男になったので、弟も刀を持ち槍を持って、そしてでかけたが、(すぐに)野営した。ほんの少し進んでは野営し、戦争の祈禱を行った。後から後から行うのだが、何とまあ(みんな)雄弁であることかわからないほどで、本当の雄弁家ばかりであり、戦争のお祈りの上手な人たちばかりと、一緒に行ったのであった。

³⁹ Mosirpa-un-sar : 直訳すれば「国の上手の菅原」であるが、具体的な場所がわかっているわけではない。ただし、白沢氏は sar ということから、特定の地域を思い浮かべていたようである。

⁴⁰ tuminonnoytakpa : 戦いのために、行く先々の神々に祈りを上げて、できるだけ多くの味方についてもらおうとするのである。だから敵地にまで一気にいかず、少しづつ進んでは野営してお祈りをするのである。

rewsi=an ranke rewsian ranke kor, ne
Mosirpa-un-sar or un paye=an ruwe ene an h_i
ne. Mosirpa-un-sar or un kur anakne あの、
何だっけ？ 深い川の底にいるもの。

中川「深い川の底にいるもの？」

うん。何たっけ？

佐藤「動物？ 魚？」

魚でない。あれ馬の、馬、川さ引っ張りこん
で

佐藤「mintuci？」

mimtuci⁴¹ そうだ mintuci。教えてもらって
よかった(笑)。ほんとに教えてもらわなばゆへ
ないものね。ちょっと忘れたやつなんか思いだ
すとおもっても、ちょっと出てこない。

mimtuci sekora=ye p, Mosirpa-un-sar or un
kotankorkur, mintuci sekora=ye p, inawcipa
utorsam ta poro, nis or eus kane an poro
cikuni as wa, ne cikuni kitaykehe ta mintuci
sekor a=ye p, tumi sermak ne an pe kor wa okay
wa, neun topattumi kusu paye yakka, newaan pe
tura wa paye するんだと。

泊まり泊まりしながら、そのモシリパウン
サラへ行ったのだ。モシリパウンサラの人は、
あの、何だっけ？ 深い川の底にいるもの。

中川「深い川の底にいるもの？」

うん。何ていったっけ？

佐藤「動物？ 魚？」

魚でない。あれ馬の、馬、川に引っ張りこ
んで

佐藤「ミムトウチ？」

ミムトウチ、そうだミムトウチ。教えても
らってよかった。ほんとに教えてもらわなけ
れば言えないものね。ちょっと忘れたやつな
んか思いだそうとおもっても、ちょっと出て
こない。

ミムトウチというもの、モシリパウンサラの
村長は、ミムトウチというものを、幣棚の脇
に大きな、天まで届くような大きな木が立っ
ていて、その木のとっぺんにミムトウチとい
うものを、戦の守護神として持っていて、ど
こへトパットウミに行っても、それが一緒
に行くんだと。

⁴¹ mimtuci : 各地で mintuci、nintuci、huntuci などと呼ばれ、日本語の「みずち」という言葉から入った語だと考えられるが、どの話者も一様に「カッパ」のことだと言う。白沢氏も「馬もひっばりこんで、kankan (腸) ひっばって、食べてしまうくらな力あるんだと。皿さ水入っていれば」(N9103082.FN) のように、カッパを彷彿とさせるような描写をしている。

そうするもんだから、tura wa paye wa topattumi kor ⁴²とつてもうまくいく。pirkano topattumi easkay wa hosippa あいつらだ、sekor haweoka kor

“teeta wano, eun paye=an y_akne, <ne> ne mintuci から先に a=ronnu sekor kane yaynu=an kor oka=an pe ne a p ... ne kusu.”

sekor kane kotankorkur hawean kor, newaan mintuci Mosirpa-un-sar or un, a=i=tura wa paye=an. rewsu=an ranke rewsu=an ranke kor ki. poro ape ari wa, ape okari tuminonnoytak hawe, nepenepo pawetokkor kur patek oka wa hawas y_a ka a=eramuskari no, si pawetokkor kur patek ne hine,

paye=an ayne, ne Mosirpa ta paye=an ruwe ene an h_i ne hine, <ne> kotankorkur uni ta ahup して, kotankorkur kocaranke ⁴³ ... kocarankepa ruwe ene an h_i ne akusu, <su> kocaranke kur kocanake kor oka orowa⁴⁴,

そうするもんだから、一緒に行ってトパットウミすると、とつてもうまくいく。うまくトパットウミをしとげて戻ってくるのがあいつらだ、と言うと

「昔から、そこに行ったなら、そのミムトウチから先にやっつけようと思っていたんだが・・・いたのだから」

と、村長も言いながら、そのミムトウチ(のいる)モシリパウンサラへ、私たちもともに行つた。泊まり泊まりしながら行つた。大きな火を焚いて、火の周りで戦の祈りをする声は、何とまあ雄弁な人たちばかりであることかわからないほど、本当に弁の立つ人たちであつた。

(そうやって)行くうちに、そのモシリパに着いて、村長の家に入って、村長に談判をすると、談判をする者は談判をしていたが、

⁴² kor と言ってから、実際にはかなり間を空けて言葉を選んでおり、少し笑いながら「とつてもうまく行く」と言っている。本当は topattumi に対して「うまく行く」などという、肯定的な表現を使いたくなかつたのだが、よい言い回しが思いつなかつたのだらうと思う。

⁴³ kocaranke : ko-「一に対して」caranke「談判する」。このあたりからちょっと展開が予期せぬ形になってくる。つまり、トパットウミに対する復讐戦を行うために武装して行つたのにもかかわらず、caranke「談判」でことを収めようとするのである。これが一般的な展開ではないことは、解説で述べたとおりである。

⁴⁴ ahup 以下ここまですつと三人称で語られているということは、自分はその中に加わっていないことを示すと考えると、外にいたことになるのだが・・・註49参照。

ne poro sunku sunku corpok ta, poro ape ari
 wa uhuyka p ne kusu, <su> sunku uhuy wa arpa
 ayne, tane poon rasuhu ne pakno ne kor, <kor>
 sunku kitay ape uk pe ne kusu, sunku ham uhuy
 hum konna ukoparototke⁴⁵ kor, hemesu ruwe ene
 an h_i ne akusu, newaan kamiyasi⁴⁶ <si> rik ta
 an ka eaykap, ran ka eaykap. ran せば下に
 aperi=an w_a, ape ruy pe ne kusu, ran ka
 eaykap kor an ayne, cikuni horak pe ne kusu ...
 cikuni horak akusu, cikuni kitay un みんな
 ukohoyuppa hine, <ne> hemanta an pe⁴⁷
 a=ukokikkik hine, a=ukokikkik wa a=rayke⁴⁸
 siri a=nukar⁴⁹ ruwe ene an h_i.

(その一方で) その大きなエゾマツの下に、
 大きな火を焚いて燃やしたので、エゾマツは
 燃えて行って、(幹は) しまいに小さな木っ
 端ほどになり、エゾマツのてっぺんにも火が
 ついたので、エゾマツの葉が燃える音をパチ
 パチと立てながら、(火が) 上って行くと、
 その化け物は高い所にもいられず、下りるこ
 ともできず。下りれば下に火が焚いてあり、
 激しく火が燃えているものだから、下りるこ
 ともできずにいるうちに、木が崩れ落ちる
 と、梢の方にみんな走って行って、化け物
 をポカポカ殴って、殴り殺してしまったのが
 見えた。

⁴⁵ ukoparototke: 「パチパチと音を立てる」だが、白沢氏は後で聞き直した時、ここは kohummatki と言うつもりだったと述べている。「すごい音を立てて燃え上がった」という描写になる場面だと述べているところから、kohummatki は「ごうごうと音を立てる」というところか。

⁴⁶ kamiyasi: 方言により人により、kamuyasi とか、kamnasi とか言われる。「化け物」の意味。kamuy に樺太で「化け物」を意味する oyasi のついた形か? 白沢さん自身 kamuyasi という語形も用いるが、この部分では kamiyasi と発音している。

⁴⁷ hemanta an pe: hemanta は「何」という疑問詞だが、「わけのわからぬもの」という意味から、「嫌なやつ」「化け物」という意味にも用いられ、悪口でもよく用いられる。

⁴⁸ a=ukokikkik wa a=rayke: 敵の強力な守護神ということで相当前置きをしておきながら、実にあっさり退治してしまったものだが、これはウエペケレの常套的な表現法である。ウエペケレでは筋の流れの方を重視するので、戦いの場面に詳しく時間を裂くようなことをしない。それがユカラなどの英雄叙事詩との違いで、英雄叙事詩であれば10倍以上の語数を費やして、この戦いの場面を描写するかもしれない。せつかく刀や槍を研いでいったのに、tuye「切る」も otke「突く」もしないで、kikkik「殴る」して殺してしまったのは、この部分が戦いの準備をするまでの話とはつながっていないことを示すともとれる。

⁴⁹ a=nukar: この「見えた」あるいは「私は見た」というのが、どこに視点をおいての話なのかが問題になる。要するに主人公はミムトウチ退治には加わっていなかったようなので、室内で老人と一緒に談判をする側に回っていたのかと思うと、註44に示したように家の中にも入っていなかったようである。そうすると、わざわざここまで武装してやってきて、みんなのすることをただ見ていただけということになる。仮に家の中にいたとしても、神窓を通して果たしてそんな情景が見えるかということ、それも不自然に思える。

aoka anakne nep も a=ye ka somo ki. まだ
hekaci okkaypo⁵⁰ だから nep も a=ye ka somo
ki p ne kusu ... pe ne korka, a=tura utar
nepenepo pawetokkor wa hawas y_a ka
a=eramuskari. mimtuci ukokikkik hine rayke
ruwe ene an h_i ne.

orowa ne caca kocaranke wa orowano,

"kotanu ta ne yakka, ekimne katu wen kur⁵¹
an ruwe ne wa, patci sinep a=epausi, tuki
sinep a=epausi, tup a=epausi sekor hawean kor,
caranke. sunke caranke ikka caranke ki wa,
kotanu un utar ka arikinne erampekamam kor
okay pe ne yak a=ye hi a=nu kor okay utar ne"

sekor caca kamuy hawean kor ki⁵² p ne kusu,
kotanu un utar⁵³ kimatekka hawe ene an h_i.

私たちは、何も言いもしなかった。まだ若
造だから、何も言いもしないでいたので・・・
いたけれど、一緒に行った人たちはなんとま
あ雄弁であることか。ミムトウチをみんなで
殴って退治してしまった。

そして、あのおじいさんが（村長に）談判
して、

「(モシリパウンサラの) 村でも、狩の仕方が
悪い人がいると、鉢ひとつよこせ、盃ひとつ
よこせ、ふたつよこせとって、談判をふっ
かける。嘘の談判、盗人の談判をふっかけて、
村人たちも大変困っているということを開
いている者どもだ」

と、おじいさんは言いながら談判したの
で、村びとたちをせき立ててこう言った。

⁵⁰ hekaci okkaypo : こういう語が決まった形であるのか、それとも hekaci 「男の子」と okkaypo 「若者」ということで、弟と自分を指しているのか、それとも hekaci と言ってから okkaypo と言い直しているのか不明。ただし、音声を聞く限り言い直しているようには聞こえない。どちらにせよ、自分たちが一人前の大人ではないということを行っているのは確かなので、訳のようにした。

⁵¹ ekimne katu wen kur : 字義通りには、「狩の仕方が悪い人」ということだが、白沢氏の説明によると、自分が行ってとろうとした獲物をお前ら行ってとったな、とか言って難くせをつけるのである。

⁵² ki : こういう代動詞的な ki は、解釈の時について見落とされがちだが、前に出て来た何らかの動詞の反復を避けるために用いられているのだということに留意しておかなければならない。ここでは 8 行前の kocaranke を受けている。

⁵³ この kotanu un utar は、caca kamuy の連れて来た村人たちだとしてしまいそうになるが、そうではなくて、このモシリパウンサラの村人たちだということである。ということで、ここはトパットウミをしかけてきた村だったはずなのだが、悪いのは村長だけで、後の村びとはその被害者ということになってしまっている。

"tane anakne nep a=sitoma p ka isam ruwe ne na. <na> eci=oypepi⁵⁴ tak y_an, uk y_an."

sekor_ rayhotuypa akusu orowano inne utar uekarpa hine,

"tan patci a=kor pe. tan sintoko a=kor pe. tan tuki a=kor pe ne ruwe ne. tan otcike a=kor pe ne ruwe ne."

sekor haweoka kor, <kor> ukoesikari hine soyenpa wa isam. oka ta inkar=an akusu, <su> tumuan⁵⁵ nispa horari ruwe pakno horari p ne anan pe ne korka, kotanu wa rura, sunke caranke ikka caranke ki wa, kotanu wa rura p, usa tuki ne yakka sintoko ne yakka ikirihi, poronno ape etok esik kane siran ruwe ne a p, yayan nispa horari ruwe pakno horari kur ne anan ruwe ene an h_i ne wa

"tewano neno an wen caranke, sunke caranke ki wa ne yakne, <ne> kanna a=nukar y_akne, a=siknure somo ki kusu ne ruwe ne na. <na> pirkano nu"

「もう何も恐れるものはないぞ。お前たちの食器を持っていけ、取って行け」

と叫ぶと、大勢の人が集まって来て、

「この鉢は俺のだ。この行器は私のだ。この盃はうちのだ。このお膳は僕のだ」

と言いながら、取り合いして出て行ってしまった。その後を見てみると、ただのつまらない長者が暮らすほどの暮らしぶりであったけれど、村から持って来た、嘘の談判、盗人の談判をして、村から持って来たもの、盃だの行器だのが山をなして、たくさん横座いっばいにあったように見えたのだが、(それを持って行かれてしまうと) ただの長者が暮らすほどの暮らしぶりのの者であることがわかった。

「これからこのような悪い談判、嘘の談判をしたなら、また私が目にしたならば、生かしてはおかないからな。よく聞いておけ」

⁵⁴ eci=oypepi : 言うまでもないが、ここでいう oypepi 「食器」は、itanki 「椀」や nima 「木皿」のような、日常で使われる食器のことを指すのではない。テキストに出て来た patci 「鉢」 tuki 「盃」 sintoko 「行器」のような、祭具として用いられるものを指すのである。

⁵⁵ tumuan は、久保寺辞書に「tumuai-shirka 醜貌な、醜婦」「tuman kamuy 猛き神、よのつねの神」「tumuan nanka kor menoko よのつねの顔を持つ女」などとある語で、悪いニュアンスを持った「普通の、凡庸な」という意味らしい。ここでも yayan 「普通の」と同じ文脈で使われている。

sekor kane a=kocaranke-hoppa wa, a=hoppa
ruwe ene an h_i ne hine, <ne> hosippa=an w_a
arki=an⁵⁶.

nepenepo a=tura utar i=erampokiwen w_a
sirki ya ka a=eramuskari kor, hosippa=an w_a
arki=an ruwe ene an h_i ne hine, <ne> nispa
kotan ta iyorot utar ne ruwe ne korka⁵⁷,
i=erampokiwen. okaypo utar ka i=erampokiwen.
ne rupne mat ka, onne kur ka arikinne i=omap.

a=kor ... a=akihi a=ukoomap kor a=respa,
oro ta a=yuputari rupne p ne kusu, cise okari
cise ... cisekarpa wa⁵⁸, oro ta pirka katkemat
etun w_a arki wa a=korpora⁵⁹a=korpora kane,
a=kor ekasi ne ya, "a=onaha" sekor itak=an
yakka pirka ekasi, poho utari matkore ruwe
ene an h_i ne hine, orowa iyotta pon menoko
<ko> a=i=kore wa, sinna cise a=kar wa
a=i=kore kusu ne kusu,

と、談判の言葉を残して、そのままにして、
村に戻ったのだ。

なんとまあ一緒に行った人たちが私たち
をあわれみながら、戻ってきてくれたこと
か。長者の村にいる人たちであるが、私たち
をあわれんでくれた。若者たちも私たちをあ
われんでくれた。あのおばあさんも、おじい
さんもとて私たちをかわいがってくれた。

弟を私はみんなと一緒にかわいがりなが
ら育て、そこで兄さんたちも年輩になったの
で、家の周りに家を・・・家を立てて、そこ
に美しい奥さんをみんなもらってきて、私の
おじいさんも、「お父さん」と呼んでもよい
ようなおじいさんだが、その息子たちに妻を
もらってやって、それから一番末の娘を私に
くれて、別の家を作ってくれるということ
で、

⁵⁶ 結局、caca kamuy が談判したのは sunke caranke, ikka caranke に関してだけであり、topattumi のことは問題にもしていない。おまけに主人公の兄弟は、一族の仇の村にまで乗り込みながら、何もしないで帰ってくることになってしまっている。この展開は普通ではなく、ふたつの話の筋の混交が起こったものとみて間違いない。

⁵⁷ nispa kotan ta iyorot utar ne ruwe ne korka : このまま訳すと訳文のようになるが、これだとあまり意味がよくわからない。iyorot utar a=ne だったとすると、「私たちは長者の村に（救われて）仲間入りしたのだが」となり、より理解しやすくなる。ただし、実際には a=は聞こえない。

⁵⁸ cise okari cisekarpa wa : ひとつの家には原則としてひと組の夫婦しか住まない。子供が大きくなって結婚する時には、親元から出て新しい家に住むのである。ただし、その新しい家は親の家の周辺につくるので、一族は固まって暮らすことになる。

⁵⁹ etun wa arki wa a=korpora : 逐語訳すると「借りてきて、与えられた」となる。妻を「もらう」ことを etun 「借りる」というのはアイヌ語における有名な表現であり、萱野茂氏の『妻は借り物（アイヌ民族の心、いま）』（北海道新聞社、1994）という本のタイトルにもなっている。

"Urayusnay un eci=hosippa wa, cise eci=kar wa, Urayusnay ta eci=supuyaatte⁶⁰ yak pirka ruwe ne na."

sekor kane hawas kor, iyotta だか⁶¹ oro ta ituresne pon menoko a=i=turare hine, <ne> a=uni ta a=yup-utari ne yakka usa aepi⁶² poronno se hine, a=i=rura wa, hosippa=an ruwe ene an h_i ne wa,

inkar=an akusu, a=unihi ne yakka tane sirkamu wa munin w_a an ruwe ene an h_i ne. ne wa orowa それから親のこと言わんの変だと思った。⁶³

中川「言わなかったの」

うん。orowa a=unihi horak. a=unihi a=kerkeri wa a=osurpa wa, orowaun okake ta, poro cise a=yup-utari kar hine, oro ta a=i=hoppa ruwe ene an h_i ne.

お前たちはウライウシナイに戻って、家を建てて、ウライウシナイを再興するのだぞ」

と言うと、そこに妹である娘と一緒に連れて行かせ、私の家に兄さんたちも食べ物を色々たくさん背負ってきて、私たちを送って来てくれて、戻っていった。

見ると、私の家も今はつぶれて腐ってしまっている。そこで、それから親のこと言わないのは変だと思った。

中川「言わなかったの」

うん。それから家が崩れていた（ので）、家のごみを掃除して捨てて、それからその後で、大きな家を兄さんたちが作ってくれて、私たちを残して去って行った。

⁶⁰ eci=supuyaatte : supuya 「煙」 at 「立つ」 -te 「～させる」 = 「家を構えて生活する」: 日本語の「かまどを持つ」 = 「書体を持つ」という表現とも通ずるものがあるが、ここではもちろん廃村となった村を再興するという意味合いで使われている。

⁶¹ iyotta だか: 「だか」は日本語。白沢氏に限らず、何か言い損なって訂正するときによく使われる。

⁶² usa aepi : aepi は aep の所属形だが、ここでは usa 「色々な」の後ろに置かれているためにこの形をとっている。usa の後でなぜ所属形になるのかは不明だが、「食べ物」という集合の中の色々なものということで、そうなるのかもしれない。

⁶³ 通常このような展開であれば、親が殺されてそのままになっているのだから、ここで親の供養をしたという場面があるはずだが、それが兄から聞いた話の中で語られていないのを不審に思ったというのである。このことは、トパットウミに来て一家を殺したはずの村長に、復讐しないで帰ってしまうという展開と無関係ではあるまい。すなわちこの話は、白沢氏が兄イソキチ氏から聞いた時点で、すでにトパットウミの話から嘘の談判の話にずれていた可能性がある。

poronno, aep ne yakka su ne yakka poronno
 a=kor wa⁶⁴ arki wa, a=i=kohoppa ruwe ene an
 h_i ne wa, orowano, oro ta <ta> pon menoko
 osoro sirka ta anu siri ka isam no⁶⁵, mun nuwe
 ka ki, itapiru ka ki <ki>.

anoka anakne a=akihi turano ekimne=an kor,
 tup sumawe a=kor_ rep sumawe a=kor kor,
 "a=yup-utari" sekor itak=an kor oka=an pe ne
 akusu⁶⁶, a=yup-utari ka ekasi ka a=tak wa ...
 a=tak kor, arki wa turano pirka ... pirka aep
 a=e. pirka ... hosippa kusu ne kor pirka kam
 poronno a=sere pa wa hosippa.

orowa a=yup-utari ekimne wa kamuy ronnu
 kor, a=i=tak kor paye=an w_a, hosippa=an kusu
 ne kor, a=e usi ka pirka usi a=i=kopunpa wa
 a=e p ne korka, hosippa=an kusu ne kor, pirka
 usike a=i=konumke wa a=i=sere wa hosippa=an
 kane kor, oka=an ruwe ene an h_i ne ayne, <ne>

たくさん、食べ物も鍋もたくさん持ってき
 て、置いていってくれた。そして、そこで娘
 (妻)は腰を下ろして休むこともなく、ごみ
 を掃いたり、拭き掃除をしたりした。

私たちは弟と一緒に山に狩に行って、二つ
 の獲物、三つの獲物を捕ると、「兄さんたち」
 と呼んで暮していたので、兄さんたちもおじ
 いさんも招いて、彼らがやってくると一緒に
 おいしい料理を食べる。帰ろうとするとよい
 肉をたくさん背負わせて帰す。

そして兄さんたちが山へ狩に行ってクマ
 を捕ると、(今度は) 私たちが招かれて行き、
 帰ろうとすると、食事の時もおいしい所をよ
 そってもらって食べるのだが、帰ろうとする
 と、よい所をを選んで背負わせて帰してくれ
 などして、暮していた。

⁶⁴ su ne yakka poronno a=kor wa : ここでわざわざ su 「鍋」を持ってきたと描写していることは、注意してよい。たとえ他の家財道具は持ってこれなくても、鍋だけは持ってこなくてはならない。なぜなら、それは自分たちでは作れないものだから。ということを見ると、ここでは単に色々なものの代表として su を挙げたのではなく、特にそれを持ってくると言うことが重要だったのだとも考えられる。

⁶⁵ osoro sirka ta anu siri ka isam no : 逐語訳すれば、「お尻を地面の上に置く様子もなく」。働き者であることを示す常套句だが、普通女性に対してのみ用いられる。

⁶⁶ pe ne akusu : 逐語訳すると「(〜する) と」だが、それだと次にうまくつながらない。pe ne kusu と言おうとしたのだと判断して、訳をつけた。

a=macihi toyta kor, tu pu epuni, re pu epuni⁶⁷. nep a=e rusuy, nep a=kor_ rusuy ka somo ki no oka=an akusu, tu pa re pa ne kor honkor hine, <ne> sine hekaci kor_ ruwe ene an h_i ne. i=arke a=yasa apekor an⁶⁸ hekaci kor_ ruwe ne. orowano a=ukoomap kor_, ren a=ne ... inen a=ne, inen a=ne wa oka=an⁶⁹ ruwe ene an h_i ne kusu, nep a=emismu ka somo ki no, <no> a=kor hekaci a=ukorpare wa a=ukoomap kor oka=an pe ne kusu, mismu=an ka somo ki no oka=an.

aep ne yakka, ekimne=an kor kam ne yakka cep ne yakka, cepkoyki=an kusu arpa=an kor, pirka cep patek, a=akihi ne yakka tane ekimne ka easkay, cepkoyki ka easkay pe ne kusu, <su> tun a=ne wa cep ka kamuy ka yuk ka a=ronnu. nep a=e rusuy, nep a=kor_ rusuy ka somo ki no oka=an ayne,

私の妻は畑仕事をする、ふたつの倉を建て、三つの倉を建てる(ほど収穫を上げる)。何を食べたいとも、何を欲しいとも思わず暮していると、二、三年して子供を宿し、男の子をひとり産んだ。私と瓜二つの男の子を産んだ。そして(妻)ともども可愛がって、三人で・・・四人で暮っていたので、寂しいとも何とも思わずに、息子を取り合いしながら妻と可愛がって暮っていたので、寂しいとも思わずに暮っていた。

食べるものも、山に行けば肉であれ魚であれ、魚捕りをしに行くと、よい魚ばかり、弟ももう狩に行くことができるようになり、魚捕りもできるようになったので、二人で魚もクマもシカも捕った。何を食べたい、何を欲しいとも思わないで暮らしているうちに、

⁶⁷ tu pu epuni re pu epuni : たくさんの収穫を上げることを表す常套句だが、epuni をどのように解釈するのか、いささか問題である。白沢氏は「倉に作物を入れること」(N9109210.FN)だと説明している。この説明に従うなら、epuni の目的語は「作物」ということになりそうだが、そうなると pu が epuni と文法的にどういう関係になるのかが不明になる。e-が「一の頭」を表す接頭辞だとすると、この e-の受ける名詞は pu 以外には考えにくい。pu 「倉」 e- 「一の頭」 puni 「一を持ち上げる」ということだとすると、「(その作物を入れるために新たに) 倉を建てる」という意味だと考えられるか。

⁶⁸ i=arke a=yasa apekor an : 逐語訳すれば、「私の半分を裂いたような」。そっくりであることを表す常套表現。

⁶⁹ ren a=ne ... inen a=ne inen a=ne wa oka=an : 「三人で」と言ってから、「四人で暮して」と言い直している。自分と妻の間に息子が生まれて三人と言ったところで、弟がいることを思い出し、四人と言い直したのであろう。結婚するまで、弟は兄夫婦と同居していたということがわかる。

a=akihi ka cise a=kar wa, orowa eun pirka
katkemat a=yup-utari tura wa sap w_a, a=kore
wa, orowano pirka ukoyantone, uatceun=an⁷⁰
a=akihi turano ki wa, a=akihi nep ka pirka p
kor wa ek kor, i=tak ka ki, kor wa ek wa i=ere
ka ki. nep ka kamuy kam ka a=kor kor, cep ka
a=kor kor, a=koanpa ka ki.

utaspa pakno ki kor oka=an ayne, <ne>
a=akihi ne yakka pokor wa ... matkor wa pokor
pe ne kusu, <su> a=kor hekattar utar
uekatayrotke wa utura sinot kor oka=an.
a=yup-utari turano, sakekar kor i=tak. sake
a=kar kor a=tak. utaspa neno ikipa=an kor,
a=yup-utari ne yakka poronno hekattar utar
kor pe ne kusu, <su> a=kor ... paye ...
a=i=tak kor a=kor hekattar a=tura wa paye=an.

orowa a=yup-utari i=koykutasa
i=koypetasa kor, a=poho⁷¹ utari opitta tura
wa arki kane p ne kusu, inne an w_a nep
a=esirkirap ka somo ki no⁷² oka=an ayne,
asinuma ka ... tane a=poutari ka rupne wa,
a=unihi okari cisekar=an w_a oro ta a=ari.

弟も家を建てて、そこへ美しい婦人を兄さ
んたちが連れて下りて来て、弟に嫁がせた。
そして、弟とお互いの家に泊まりあったり、
よい近所づきあいをして、弟が何かおいしい
ものを手に入れてくると、私を招いて、食べ
させてくれ、私の方が何か熊の肉でも手に入れ
、魚を手に入れると、私は（弟のところに）
持って行った。

そういうことをお互いに行っているうちに、
弟も子供ができ・・・奥さんをもらって子供
ができたので、私の子供たちと仲良く一緒に
遊んで暮らしていた。兄さんたちとも、（彼
らが）お酒を作ると招かれ、私がお酒を作る
と、私が彼らを招いた。お互いにそんな風に
して暮らしていて、兄さんたちにも大勢子供
ができたので、招かれると、子供たちを連れ
て（兄たちの所へ）でかけた。

それから兄さんたちが私たちのところへ
酒宴・饗宴に来る時は、子供たちもみんな一
緒に連れて来るので、大勢でいて何も困るこ
となく暮らすうちに、私も・・・今や息子も
大きくなり、私の家の周りに家を作って住ま
わせた。

⁷⁰ uwatceun=an : 田村辞典、萱野辞典によると、atce は「よそ」と訳されている。それからすると、u-atce-un は「互いに・よそ・につく」で、「別々の家に住んでいる」という意味かと思われるが、白沢氏は、隣同士に住んでいることを言っているのだという。

⁷¹ a=poho とはつきり言っているが、「私の子供たち」を兄さんたちが連れてくるのでは、つじつまが合わない。ここは poho の言い誤りと考えて訳をつけた。

⁷² inne an wa nep a=esirkirap ka somo ki no : こども意味のとりにくいところだが、一族が大勢いてお互い助け合っているのでは、何不自由ない、という意味か？

ene ekimne=an kor, ene oka usi ta
ekimne=an kor pirka yuk ka pirka kamuy ka
a=ronnu p ne hi, a=tura wa epakasnupa⁷³ p ne
kusu, i=akkari ka tane ison kor okay ruwe ene
an h_i ne wa, orowa a=poutari ka rupne hike
opokin, a=unihi soyke ta cisekar=an w_a a=ari
p ne kusu, nep ka kamuy ka, pirka kamuy, poro
kamuy ronnu kor

“hokure arki wa nukar y_an, onkami yan.”

sekor haweoka kor i=tak pe ne kusu, aoka
ka a=macihi turano, a=poho utari a=koykutasa
a=koypetasa, orowa a=yuputari poho utari ne
yakka tane rupne p ne kusu, ekimne wa yuk ka
nuwekoan. kamuy ka nuwekoan. cep ka
nuwekooka.

menoko ne hike, toyta wa <wa> tu pu epunpa,
re pu epunpa. a=matnepoutari ne yakka poronno
an pe ne kusu, a=macihi kasuy wa toyta hike
ka oka. rupne sarampe nokan sarampe sapte wa
<wa>

“ninu yan amipi⁷⁴ kar y_an”

狩をする時には、このようなところに狩に
行くと立派なシカや立派なクマを捕れるぞ
ということ、私は一緒に行って教えたの
で、もはや私以上に狩上手になって、子供た
ちも大きくなった順に、私の家の表に家を建
ててやったので、クマでも何でも、立派なク
マ、大きなクマを捕るといって、

「さあ、来て見てください。お祈りしてくだ
さい」

と言って私たちを招くので、私たちも妻と
ともに、息子たちの所へ酒や料理の宴に赴
く。そして兄さんたちの息子たちももう大き
くなったので、山に行くとシカもたくさん捕
ってくる。クマもたくさん捕ってくる。魚も
たくさん捕ってくる。

娘の方は、畑を耕すとふたつの倉、三つ
の倉を建てるほどだ。私の娘は大勢いるの
で、妻を手伝って畑仕事をするものもいる。
大きな布、小さな布を出して、

「縫い物をしなさい、着物を作りなさい」

⁷³ epakasnupa : 文脈からいって、a=epakasnu という形が期待されるところなのだが、人称接辞は聞こえない。あるいは、その直前の a=tura wa 「同行して」という語句が、この人称接辞の脱落に関係しているのかもしれない。

⁷⁴ amipi : この所属形は、「その布で」という、材料と製品の関係を表すものだと思われる。

sekor haweoka kor ... hawean, a=macihi ki
kor korpore kor, kemeyoni kemeninu wa,
ukokarkari wa kemeyonpa wa isam⁷⁵ w_a,
a=nukare kor,

"nepenepo eci=askay ruwe. tap akkari na
eci=poro yakun, na eci=kemeyki easkay ruwe ne
wa."

sekor haweoka kor ... hawean kor, matnepo
utari kopuntek pe ne kor oka=an ruwe ene an
h_i. asinuma は ekimne or un a=poho utari
a=tura wa, ekimne a=epakasnu hi koraci,
a=macihi ka iki ruwe ene an h_i ne. nep ka kap
ka ene a=kar pe ne hi matnepo utari epakasnu
kor oka=an ayne,

tane anakne asinuma ka <ka> kemapase=an pe
ne korka, a=kokowutari ne yakka a=poutari ne
yakka, nep ka ekimne yakka pirka yuk patek
pirka kamuy patek oskonpa wa arki wa, a=i=tak
ka ki p ne kusu, nep a=esirkirap ka somo ki
no, <no> nep ka etoyta pa hikeka, i=kousaraye
pa p ne kusu, onne=an y_akka, kemapase=an
y_akka, nep a=e rusuy, nep a=kor_ rusuy ka
somo ki no oka=an ayne onne.

と(妻が)言いながら(布を)与えると、
針でチクチクやって、丸めて縫い縮めてしま
って、(妻に)見せると、

「何とまあ上手なこと。これからもっと大き
くなると、もっと針仕事が上手になるよ」

と、(妻が)言うと、(娘たちは)喜んで暮
らしていた。私が山へ息子たちを連れて、狩
の仕方を教えるのと同じように、妻も(娘た
ちに)そうした。何でもかんでも、どうやっ
て作るかを娘たちに教えて暮らしているう
ちに、

もはや私も年をとったが、婿たちも息子た
ちも、狩に行っても、立派なシカばかり、立
派なクマばかり捕ってきては、私たちを招い
てくれるので、何不自由なく、何か畑で作物
がとれると、私たちに分けてくれるので、年
とっても、足が重くなっても、何を食べたい
とも、何を欲しいとも思わずに年老いた。

⁷⁵ ukokarkari wa kemeyonpa wa isam : 縫い物がまだよくできないので、布が糸でつれてしわくちゃ
になってしまうこと。このあたりの描写は女の子が大事に育てられることを表す時の常套表現。お
だてあげ、ほめあげて育てるという教育観が表れている。

sonno sino onne nispa a=ne ruwe ne korka,
tapne kane an pe, arsukup⁷⁶ or_ ta a=kopepka
katu an a korka, a=yup-utari ne yakka,
i=umomare a=yuputari ne yakka pirka kewtum
kor kotan ta arpa=an w_a, orowa pirka
iyorot=an ayne, orowa katkemat a=i=turare wa,
Urayusnay ta hosipi nispa a=ne ayne, tane
anakne onne=an katu, a=pohoutari opitta
a=nure, a=epakasnu kor an=an kusu, a=kotanu
penake un kotan or un utar turano, iteki
eci=ukoyki no eci=payeka ki. eci=ukoapkas
kor eci=oka yak pirka ruwe ne na.

sekor Urayusnay un nispa itak kor onne⁷⁷.
poho utar kaspaotte kor onne ruwe ne. kusu
a=ye hawe ne na.

私は本当に年老いた長者であるが、このよ
うなわけで、若い頃に苦勞をしたのだが、兄
さんたちも、私たちを拾ってくれた兄さんた
ちも、良い心を持った（人たちで、そういう）
村に私は行って、良い人たちの仲間入りを
し、妻もめとって、ウライウシナイに戻った
長者であり、（そのようにして）今は年老い
ただということ、息子たちみんなに話し
て聞かせ、教えているので、我が村の川上の
村の人たちと、決して喧嘩せずにつき合いを
し、行き来して暮らすのだぞ。

と、ウライウシナイの長者が語りながら大
往生した。息子たちに言いつけながら大往生
した。ということなので語り継がれている話
だ。

（なかがわ ひろし・千葉大学教授）

⁷⁶ arsukup : 実際の発音は aresikup のように聞こえるが、聞き直しの際にあらためて発音してもら
うと、arsukup だという。この語について、これとは別の話に関して「17、8歳前後の年令を指
すのだと思う」(N9109210.FN) と述べている。

⁷⁷ onne は「年老いる」「年老いた」という意味だが、同時に「年老いて死ぬ」「天寿をまっとうす
る」という意味にもなる。したがってこの onne は、この前に出てくる onne とは訳しわけている。
ray 「死ぬ」という言葉を使うと、変死・横死のニュアンスが出てきてしまう。前号のアイヌ口承
文芸テキスト集2「主人を助けられなかった犬」の最後の部分を参照のこと。